

アユの冷水病対策

(増養殖試験研究事業)

安木 茂

1. 研究目的

本県のアユ冷水病は平成5年に発病が確認されて以来、依然発生しつづけ、アユ資源に重大な影響を及ぼしている。そのため被害を軽減するための防疫対策を行う。

2. 研究方法

(1) 防疫対策

冷水病防疫に対する普及啓発、来歴カードの実施、放流用種苗の保菌検査、河川内発生時の状況把握と確認検査を実施した。

(2) 普及指導

種苗放流時期前に各河川漁協等を巡回して、アユ冷水病防疫に関する指針にもとづき、アユ種苗の生産・供給・輸送・放流等の確認を行った。また、放流立会等は、水産課、水産事務所との連携を図って実施した。

(3) 来歴カード

各河川に放流される県内産及び県外産アユ種苗の来歴を把握するため、生産者、輸送業者、各河川漁業協同組合にそれぞれ記帳をして頂いた。

(4) 県内産人工種苗の保菌検査

淡水飼育となる1月頃～放流月まで約1回/月の間隔で実施した。

(5) 県外産放流種苗検査

放流前に県外業者から検体を送付してもらい、事前検査を実施するとともに放流時に検体を採取し、放流後にできるだけ速やかに検査を行った。

(6) 種苗放流後の河川内でのへい死魚の検査

聞き取りと検査を実施した。

(7) 冷水病の検査と判定

PCR法(ロタマーゼ法)により実施し、陽性となった場合には遺伝子型(A型or B型)についても判別した。

3. 研究結果

県内人工種苗・養殖アユと他県産種苗の保菌検査、河川での発生状況調査、アユ種苗来歴カードの普及、情報収集等を実施した。

県内人工種苗では、放流種苗18件のうち7件で陽性となり、保菌率は前年に比べ増加した。他県産種苗では、海産畜養、海産仕立、琵琶湖産等の由来の種苗9件について検査し、内6件で保菌を確認した。

河川での発生は、高津川や江川で解禁当初に大規模なへい死がみられた。へい死魚のPCR検査をしたところ、陽性(ロタマーゼ遺伝子A型)反応が確認された。

7月下旬に、斐伊川で小規模なへい死現象がみられ、検査をしたところ冷水病菌が検出されたが、ロタマーゼ遺伝子型は病原性の強いB型であった。

8月に江川において大量へい死の情報が寄せられたが、へい死の原因については究明できなかった。(表1)

表1 冷水病検査結果

検査内容	由来	検査件数	検査尾数	陽性件数
放流種苗 保菌検査	県内人工産	18	767	7
	他県海産	3	75	2
	琵琶湖産	6	138	4
県内育成種苗・養殖魚検査		6	212	2
天然水域冷水病発生時検査		3	62	3
合計		36	1254	18
合計		48	1431	15

4. 研究成果

調査で得られた結果は、内水面漁業関係者に報告した。